

在宅脳血管障害者の地域参加のきっかけと 参加を支えている要因と援助の検討

島田 広美¹⁾ 井上 聡子¹⁾ 遠藤 淑美²⁾ 末永 由理¹⁾
佐藤 弘美³⁾ 酒井 郁子⁴⁾

要 旨

発症から5年以上経過した在宅脳血管障害者14名の回復過程の語りから、地域参加のきっかけと参加を支えている要因を明らかにし、援助の検討を行った。

地域参加のきっかけは、〔障害者のネットワーク〕、〔専門職の働きかけ〕、〔能力を発揮したいという動機〕、〔将来の希望〕、〔発症前の活動への復帰〕だった。

地域参加を支えている要因には、【同病者の存在】、【楽しみを感じられること】、【所属しているグループへの貢献を実感できること】、【明確な目的をもっていること】、【整備された環境】があげられた。

地域参加を促す援助として、1) 援助の必要なケースが迅速に把握できる体制作りと入院中から患者同士の交流が図れるような場を提供すること、2) 個々の脳血管障害者のニーズをアセスメントし、地域の社会資源についての情報を集め、脳血管障害者に最新の情報を適切に伝えていくことが必要である。

地域参加を支える援助として、1) 環境を整備する、2) 地域参加を支える要因のアセスメントと強化、3) 同病者との交流を支えることが必要である。

キーワード：脳血管障害者、地域参加、在宅

I. 緒 言

脳血管障害者は、病院において障害された機能の再獲得を目指して、リハビリテーションをうける。退院はリハビリテーションの終わりではなく、病棟という限られた生活の場から住み慣れた地域へ参加する第1歩である。酒井ら¹⁾は、脳血管障害者の回復過程における共通体験のなかで、病院の＜外に出る＞ときに現実の厳しさに衝撃を受けたり、＜壁にぶつかる＞といった体験をすると述べている。また、南雲²⁾は、障害における無力感や恥の感覚、社会から加えられる排除や忌避も手伝って、引きこもりが生じると述べている。そのため、地域で生活する脳血管障害者がその人らしく、地域とのつながりのある生活が送れるような援助のあり方が課題となっ

てくる。

そこで、本研究の目的は、在宅脳血管障害者の回復過程の語りから、地域参加のきっかけと参加を支えている要因を明らかにし、援助の検討を行うことである。

II. 用語の定義

地域参加：脳血管障害者が退院後、地域という場で他者とのかかわりをもつこと

III. 研究方法

1. 対 象：Aリハビリテーションセンターの患者会に参加し、研究の同意の得られた発症後5年以上の脳血管障害者14名。
2. 調査期間：1999年7月～2000年4月
3. 調査方法と内容：6名の研究者で対象を分担し、1対1の半構造化面接を実施した。面接方法および内容については、プレテストを行い、研究者間で検討し、面接内容および方法の確認

1) 川崎市立看護短期大学

2) 千葉大学大学院看護学研究科博士後期課程

3) 石川県立看護大学

4) 千葉大学看護学部付属看護実践指導センター

を行った。面接内容は年齢、病歴などの基本的な事項に加え、自覚している脳血管障害の行路、セルフケアと生活の変化、障害についての考えとその変化などについて自由に語ってもらった。面接内容は対象の同意を得てテープに録音し、逐語録を作成した。面接回数は1～3回で、1回あたりの面接時間は90～120分だった。面接後、逐語録を研究者全員で読み、語られた内容を共有できるように、研究者全員で集まって語られた内容について検討した。

4. 分析方法：逐語録から対象が地域参加について語っている語りを取り出した。そこから、地域参加のきっかけと参加を支えている要因を抜き出して整理、分析した。分析は研究者全員でピアレビューを行いながらすすめた。

IV. 結 果

1. 対象の概要

全員男性で現在の年齢は50代6名、60代7名、70代1名だった。発症時の年齢は40代9名、50代2名、60代3名だった。発症からの期間は5～9年7名、10～14年4名、15年以上3名だった。障害の部位は左麻痺10名、右麻痺4名で、調査時全員が自立歩行だった。

2. 地域参加の内容

語られた地域参加の内容は、患者会12件、リハビリ教室8件、作業所（障害者の自助グループ）3件、ボランティア3件、散歩を通じた地域の人との関わり3件、発症前の活動（ロータリークラブ、旅行）への復帰2件、セミナー・教室2件、博物館づくり1件であった。

3. 地域参加のきっかけ（表1）

脳血管障害者が地域に参加するきっかけは、1）他の患者から患者会の旅行や花見に誘われたことといった〔障害者のネットワーク〕、2）退院後、医師から散歩を勧められたり、保健婦が自宅に来て、リハビリ教室に誘うといった〔専門職の働きかけ〕、3）退院後、することがなくて、自分から何か出来ることを探すという〔能力を発揮したいという動機〕、4）自分なりに将来にむけて目標にむかっていきたいという〔将来の希望〕、5）発症前から行っていた地域とのかかわりの復帰といった〔発症前

表1 地域参加のきっかけ

（ ）内の数字は語りの数

| きっかけ | 地域参加のきっかけの語りの例 |
|------------------|---|
| 障害者のネットワーク（8） | <ul style="list-style-type: none"> ・他の患者から患者会の旅行に誘われて。 ・退院する時に（患者会入会の）手続きをした。 ・同じリハビリ教室に通っている人と散歩の途中にあって声をかけてみて。 |
| 専門職の働きかけ（4） | <ul style="list-style-type: none"> ・主治医から歩くことを勧められる。 ・保健婦さんが回ってきて、（リハビリ教室に）来てみないといわれたから。 |
| 能力を発揮したいという動機（4） | <ul style="list-style-type: none"> ・退職後、最初の頃は、間がもたなくて、妻がボランティアしている老人ホームから頼まれて。走ることが好きだから、車（の運転）、それくらいのことしかできない。 ・退院してすぐ、新聞を見るしか楽しみがなかった。家にいるよりはいいと思って、市の広報をみて（障害者の自助グループに）入った。 ・近くの病院にいったが、PTがおそまつだったので、保健センターをメインにした。 |
| 将来の希望（2） | <ul style="list-style-type: none"> ・私自身の好きな古いものを集めたものを子供たちにみせてあげようと思って。 ・何かを取り入れなければ自宅ではとても食生活が大変だと思ったんです。 |
| 発症前の活動への復帰（2） | <ul style="list-style-type: none"> ・（商店街の役員、ロータリークラブを）倒れる前からやっていた。 ・（以前から）旅行が好きだから。 |

の活動への復帰〕だった。

4. 地域参加を支えている要因（表2）

地域参加を支えている要因には、【同病者の存在】、【楽しみを感じられること】、【所属しているグループへの貢献を実感できること】、【明確な目的をもっていること】、【整備された環境】があげられた。

- 1) 「（患者会の）花見みたいな全員仲間で飲んだり、食べたりすればそれでいい。」と退院後、同じ障害をもった仲間と一緒にいることでリラックスできたり、「（同病者は）何もいわなくてもわかってくれる。誰かががんばっていると俺もがんばらなくちゃという気持ちになる。」と同病者に励まされたり、【同病者の存在】が地域参加を支えていた。
- 2) 「お酒や騒ぐのが好きだから行きたくなる。行けば楽しい。」「散歩しているといろんな人から話しかけられ、人間関係が広がりました。楽しいですね。」と語られたように、参加し

表2 地域参加を支えている要因

() 内の数字は語りの数

| 要 因 | 地域参加を支えている要因の語りの例 |
|---------------------------|---|
| 同病者の存在(9) | <ul style="list-style-type: none"> ・(患者会の) 花見みたいな全員仲間で飲んだり、食べたりすればそれでいい。 ・(同病者は) 何もいわなくてもわかってくれる。誰かががんばっていると俺もがんばらなくちゃという気持ちになる。 ・みんな楽しくやるでしょ。いっしょに作業とか、やっぱり同じ仲間はうれしいね。 |
| 楽しみを感じられること(6) | <ul style="list-style-type: none"> ・お酒や騒ぐのが好きだから行きたくなる、行けば楽しい。 ・楽しみを感じられることは、水墨画、健康祭り ・散歩しているといろんな人から話しかけられ、人間関係が広がりました。楽しいですね。 |
| 所属しているグループへの貢献を実感できること(6) | <ul style="list-style-type: none"> ・(提案した作品づくりを) みんなにやってもらい、みんなうれしそうな顔をしてやるんです。(作品が) 大変うまくいったものだから、完成したって喜びがある、それぞれ個人が工夫している、それで成功するのがまたうれしい。 ・(ボランティアをして喜ばれることに対して) こんな体になって信じられないですよ。まだ、お役に立てるものがある。ありがとうって一言がすごく感じちゃう。 ・(患者会の代表をやることによって) 人の役に立つんだったらいいことだなあ。 |
| 明確な目的をもっていること(5) | <ul style="list-style-type: none"> ・外に出ていろんな人と話をして、刺激を受けなきゃほけますよ。 ・今まで子供に残せるものってない間に倒れた。(サイドビジネスとして) 自分が得たものを子供に残すことができる。 ・彼(散歩の途中で会う同病者)の為にものなるように思っていてやっている(話しかける)。 |
| 整備された環境(3) | <ul style="list-style-type: none"> ・患者会の旅行は、行く先々トイレからすべて安心です。 ・要望を出してからエレベーターのある建物で会議が行われるようになった。 ・血压だけは看護婦さんの耳できちんと測ったほうがいいと思って。 |

たことで【楽しみを感じられること】が地域参加を支えていた。

- 3) 「(提案した作品づくりを) みんなにやってもらい、みんなうれしそうな顔をしてやるんです。(作品が) 大変うまくいったものだから、完成したって喜びがある、それぞれ個人が工夫している、それで成功するのがまたうれしい。」
「(ボランティアをして喜ばれることに対して)

こんな体になって信じられないですよ。まだ、お役に立てるものがある。ありがとうって一言がすごく感じちゃう。」と語られたように、参加したことで【所属しているグループへの貢献を実感できること】が地域参加を支えていた。

- 4) 「外に出ていろんな人と話をして刺激をうけなきゃ、ほけますよ。」と活動が少なくなることでの廃用性の変化のおそれもち、その感覚が地域に参加する目的となっていたり、「今まで子供に残せるものってない間に倒れた。(サイドビジネスとして) 自分が得たものを子供に残すことができる。」と語られたように、【明確な目的をもっていること】が地域参加を支えていた。

- 5) 「患者会の旅行は、行く先々トイレからすべて安心です。」「要望を出してから、エレベーターのある建物で会議が行われるようになった。」「血压だけは看護婦さんの耳できちんと測ったほうがいいと思って。」と語られたように、安心や便利と感じられる物的・人的に【整備された環境】が地域参加を支えていた。

V. 考 察

1. 地域参加のきっかけと参加を支えている要因

1) 地域参加のきっかけ

〔障害者のネットワーク〕は、約半数の対象が地域参加のきっかけとして語っていた。今回の対象はリハビリテーション専門病院の患者会に参加している集団であったことから、同病者同士の交流は入院中から始まっており、外来で会ったり、近所にも同じ障害をもった者がいたり、情報交換しやすい環境にあったことが理由として考えられる。

地域におけるリハビリテーションの目的は、日常生活の自立性と社会的交流を目指すことである³⁾。脳血管障害者に対して、障害をもちながら生活を再構築することや社会とのつながりのある生活が実現できるような〔専門職の働きかけ〕が行われている。特に地域リハビリテーション活動として、地方自治体によって、広範に行われているリハビリ教室(機能訓練事業)における保健婦の働きかけが地域参加のきっかけになっていたと考えられる。脳血管障害者は身体運動機能や精神機能に大きな障害を受けているので、活動することに対し、

不自由感や不安を感じる人が多い。退院後、地域に出ようとした時に、不自由感や不安から、家庭に閉じこもってしまうことも考えられる。リハビリ教室の目的は、機能訓練だけでなく、同病者同士の交流の場としての役割もあり、地域参加の第1歩として有効である。

脳血管障害の発症は、人生後期に多く、突然の発症であることがほとんどである。脳血管障害者はその後の人生を障害を持ちながら生活していくことになるが、生活の再構築が進むにつれ、自己の「能力を発揮したいという動機」や「将来の希望」、〔発症前の活動への復帰〕といった、その人らしい生活に向けてのニーズが生じてくると考えられる。そのことが地域参加のきっかけとして語られたと考えられる。

2) 地域参加を支えている要因

南雲⁴⁾は新しいケア・システムとして同じ障害者によるピア・サポートの有効性について、同じ障害者をもった者同士が出会うことによって、「私一人」ではないことに気づき、疎外感が軽減される。他者を援助する行為は、自己の使命感を自覚したり、障害を負った「意味」を見出す可能性がある」と述べている。本研究においても同じ障害者をもった者同士が一緒にいることでリラックスできたり、【同病者の存在】が地域参加を支える要因になっていたと考えられる。

地域に参加することで、【楽しみを感じられること】が、地域参加を支える要因となっていた。楽しみは生活に満足感を与え、その人らしい生活につながっていくためと考えられる。

脳血管障害者はそれまで築き上げてきた仕事や生活がとぎれる体験⁵⁾をし、自分らしさが失われたと感じたり、自己の能力の発揮が困難となる。地域参加の場において、自分の役割を見出し、【所属しているグループへの貢献を実感できること】は、自己の能力の発揮の場を得たり、自分らしさを取り戻すことにつながるので、地域参加を支える要因となっていたと考えられる。

脳血管障害者自身が目的を持つことは、主体的に活動に取り組むことにつながり、目的を達成することで達成感が得られ、さらに活動を推進させる原動力となっていくことが考えられ、【明確な目的をもっていること】が地域参加を支える要因となっていたと考えられる。

脳血管障害者は、活動することに対し、不自由感や不安を感じる人が多い。そのことが脳血管障害者を地域参加から遠ざけてしまうことになると考えられる。障害者が、社会参加できる度合いは、その社会の成熟度や価値観により異なる⁶⁾。脳血管障害者の外出状況について、周囲のサポート体制が影響していたとの報告がある⁷⁾。なるべく不自由感や不安を軽減できるような物的・人的に【整備された環境】が地域参加を支える要因となっていたと考えられる。

2. 地域参加を促し、支える援助

1) 地域参加を促す援助

地域参加のきっかけをみると〔障害者のネットワーク〕や〔専門職の働きかけ〕に入っていけるようなシステムが大切であることがわかった。脳卒中情報システムなどの活用⁸⁾により、援助の必要なケースが迅速に把握できる体制作りが望まれる。また、入院中から患者同士の交流が図れるような場を提供することも必要である。このような場で、脳血管障害者が何かやりたい気持ちになったり、自分らしさをだして行動していけるように、看護者が関わる必要がある。

また、〔能力を発揮したいという動機〕、〔将来の希望〕、〔発症前の活動への復帰〕が地域参加のきっかけとなっていた者もいた。看護者は、そういった個々の脳血管障害者のニーズを汲み取っていけるように、その脳血管障害者が何に価値をおいているかを明らかにし、その人にとって意味がある活動に参加するためのいくつかの方法を探索する手助けをできるように地域の社会資源についての情報を常に集め、脳血管障害者に最新の情報を適切に伝えていくことが必要である。

2) 地域参加を支える援助

①環境を整備する

看護者は、ノーマライゼーションの考えに基づき、脳血管障害者が地域参加しやすい社会を作りあげるために必要なサービスの組織化と地域住民への教育的なかかわりを継続していく必要がある。特に地域で働く保健婦は、家庭訪問や面接相談、各種の機能訓練事業や健康教育などを通して脳血管障害者の直接の声を聞くことができる。ニーズを把握し、脳血管障害者が参加しやすい地域づくりを事業として実現化していくことは地域で

働く保健婦の役割として重要である。

②地域参加を支える要因のアセスメントと強化

看護者は、どんな援助が必要か明らかにするために、地域参加を支えている要因を明らかにしていくことが大切である。地域参加を支えている要因をアセスメントするには、脳血管障害者が地域参加をどのように意味付けているかによって異なるので、看護者は個別に、広い視点をもって関わる必要がある。そして、地域参加を支えている要因が明らかになったら、その要因を強化できるように関わっていく。

【明確な目的をもっていること】が地域参加を支えている者に対しては、その目的が達成できるように必要に応じて相談にのったり、その活動を肯定的に評価したり、支持することが援助としてあげられる。【楽しみを感じられること】が地域参加を支えている者に対しては、その人が楽しみを感じられることを強化したり、活動にとりいれる、また看護者自身も脳血管障害者と一緒に楽しむことが援助につながると考える。【所属しているグループへの貢献を実感できること】が地域参加を支えている者に対しては、地域参加の場が、自己実現の場となるような機会を提供したり、自分の役割や所属しているグループへの貢献を実感できるように関わっていくことが必要である。

③同病者との交流を支える

看護者は、ピア・サポートやセルフヘルプグループといった障害を持った人たちの活動の組織作

りのきっかけを作ったり、情報を提供したり、必要に応じてサポートできるようにしていくことが重要であると思われる。

VI. まとめ

在宅脳血管障害者の回復過程の語りから、地域参加のきっかけと参加を支えている要因を明らかにし、援助の検討を行った。

1. 地域参加のきっかけは、〔障害者のネットワーク〕、〔専門職の働きかけ〕、〔能力を発揮したいという動機〕、〔将来の希望〕、〔発症前の活動への復帰〕だった。
2. 地域参加を支えている要因には、【同病者の存在】、【楽しみを感じられること】、【所属しているグループへの貢献を実感できること】、【明確な目的をもっていること】、【整備された環境】があげられた。
3. 地域参加を促す援助として、1) 援助の必要なケースが迅速に把握できる体制作りと入院中から患者同士の交流が図れるような場を提供すること、2) 個々の脳血管障害者のニーズをアセスメントし、地域の社会資源についての情報を集め、脳血管障害者に最新の情報を適切に伝えていくことが必要である。
4. 地域参加を支える援助として、1) 環境を整備する、2) 地域参加を支える要因のアセスメントと強化、3) 同病者との交流を支えることが必要である。

引用文献

- 1) 酒井郁子、菊池祥子：脳血管障害者の回復過程における共通体験、川崎市立看護短期大学紀要、5(1)、25-32、2000
- 2) 南雲直次：障害受容—意味論からの問い—、104、壮道社、1998
- 3) 貝塚みどり、大森武子、江藤文夫編集：QOLを高めるリハビリテーション看護、第1版、223、医歯薬出版、1997
- 4) 前掲2)、121
- 5) 前掲1)、27
- 6) 野口美和子監修：図説新臨床看護学全書 第13巻身体運動機能の障害と看護／排尿機能の障害と看護、13、同朋舎出版、1997
- 7) 石井美香・小田切美姫江・生出紀子ほか：脳血管障害患者の退院後の役割と外出状況からみた社会参加状況、第28回成人看護Ⅱ、8-10、1997
- 8) 浜村明德：保健婦活動と地域リハビリテーション、保健婦雑誌、53(10)、770-774、1997